

与謝野晶子 訳

源氏物語

明石巻



一冊堂青空文庫

源氏物語

明石

紫式部

與謝野晶子訳

わりなくもわかれがたしとしら玉の涙
をながす琴のいとな
(晶子)

まだ雨風はやまないし、雷鳴が始終することも同じで幾日かたった。今は極度に侘^{わび}しい須磨^{すま}の人たちであった。今日までのことも明日からのことも心細いことばかりで、源氏も冷静にはしていられなかった。どうすればいいであろう、京へ帰ることもまだ免職になったまままで本官に復したわけでもなんでもないのであるから見苦しい結果を生むことになるであらうし、まだもつと深い山のほうへはいつてしまうことも波風に威嚇^{いかく}されて恐怖した行為だと人に見られ、後世に誤られることも堪えられないことであるからと源氏は煩悶^{はんもん}していた。このごろの夢は怪しい者が来て誘おうとする初めの夜に見たのと

同じ夢ばかりであった。幾日も雲の切れ目がないような空ばかりをながめて暮らしていると京のことも気がかりになって、自分という者はこうした心細い中で死んで行くのかと源氏は思われるのであるが、首だけでも外へ出すことのできない天気であったから京へ使いの出しようもない。二条の院のほうからその中を人が来た。濡れ鼠ぬずみになった使いである。雨具で何重にも身を固めているから、途中で行き逢つても人間か何かわからぬ形をした、まず奇怪な者として追い払わなければならない下侍に親しみを感ずる点だけでも、自分はみじめな者になったと源氏はみずから思われた。夫人の手紙は、
申しようのない長雨は空までもなくしてしまふのではないかという気がしまして須磨の方角をながめることもできません。

浦風やいかに吹くらん思ひやる袖そでうち濡らし波間なき頃ころ

というような身にしむことが数々書かれてある。開封した時からもう源氏の涙は潮時しほときが来たような勢いで、内から湧わき上がってくる気がしたものであった。

「京でもこの雨風は天変だと申して、なんらかを暗示するものだ」と解釈しておられるよ

うでございます。仁王会にんおうえを宮中であそばすようなことも承っております。大官方が参内さんないもできないのでございますから、政治も雨風のために中止の形でございます」

こんな話を、はかばかしくもなく下士級の頭で理解しているだけのことを言うのであるが、京のことに無関心でありえない源氏は、居間の近くへその男を呼び出していろいろな質問を試みた。

「ただ例のような雨が少しの絶え間もなく降っておりまして、その中に風も時々吹き出すというような日が幾日も続くのでございますから、それで皆様の御心配が始まったものだと存じます。今度のように地の底までも通るような荒い雹ひょうが降ったり、雷鳴の静まらないことはこれまでにないことでございます」

などと言う男の表情にも深刻な恐怖の色の見えるのも源氏をより心細くさせた。

こんなことでこの世は滅んでいくのでないかと源氏は思っていたが、その翌日からまた大風が吹いて、海潮が満ち、高く立つ波の音は岩も山も崩くずしてしまうように響いた。雷鳴と電光のさすことの烈はげしくなったことは想像もできないほどである。この家へ雷が落ちそうにも近く鳴った。もう理智りちで物を見る人もなくなっていた。

「私はどんな罪を前生で犯してこうした悲しい目に逢あうのだろう。親たちにも逢えずか

わいい妻子の顔も見ずに死なねばならぬとは」

こんなふうに言つて歎く者がある。源氏は心を静めて、自分にはこの寂しい海辺で命を落とさねばならぬ罪業ざいごうはないわけであると自信するのであるが、ともかくも異常である天候のためにはいろいろの幣帛へいはくを神にささげて祈るほかがなかった。

「住吉すみよしの神、この付近の悪天候をお鎮めしずください。真実垂跡すいじやくの神でおいでになるのですから慈悲そのものであなたはいらつしやるはずですから」

と源氏は言つて多くの大願を立てた。惟光これみつや良清よしきよらは、自身たちの命はともかくも源氏のような人が未曾有みぞうな不幸に終わってしまうことが大きな悲しみであることから、氣を引き立てて、少し人心地ひとこころのする者は皆命に代えて源氏を救おうと一所懸命になった。彼らは声を合わせて仏神に祈るのであった。

「帝王の深宮に育ちたまい、もろもろの歡樂に驕りおごたまいが、絶大の愛を心に持ちたまい、慈悲をあまねく日本国じゆうに垂たれたまい、不幸なる者を救いたまえること数を知らず、今何の報いにて風波ふうなの牲にえとなりたまわん。この理を明らかにさせたまえ。罪なくして罪に当たり、官位を剥奪はくだつされ、家を離れ、故郷を捨て、朝暮歎きに沈淪ちんりんしたもう。今またかかる悲しみを見て命の尽きなんとするは何事によるか、前生の報いか、こ

の世の犯しか、神、仏、明らかにましまさばこの憂い^{うれ}を息めたまえ」

住吉^{すみよし}の御社^{みやしろ}のほうへ向いてこう叫ぶ人々はさまざまの願を立てた。また竜王^{りゅうおう}をはじめ

大海の諸神にも源氏は願を立てた。いよいよ雷鳴ははげしくとどろいて源氏の居間に続いた廊へ落雷した。火が燃え上がって廊は焼けていく。人々は心も肝^{きも}も皆失ったようになっていた。後ろのほうの廚^{くひや}その他に使っている建物のほうへ源氏を移転させ、上下の者が皆いっしょにいて泣く声は一つの大きな音響を作って雷鳴にも劣らないのである。

空は墨を磨^すったように黒くなって日も暮れた。そのうち風が穏やかになり、雨が小降りになって星の光も見えてきた。そうなるとこの人々は源氏の居場所があまりにもつたいたなく思われて、寝殿のほうへ席を移そうとしたが、そこも焼け残った建物がすさまじく見え、座敷は多数の人間が逃げまわった時に踏みしだかれてあるし、御簾^{みす}なども皆風に吹き落とされていた。今夜夜通しに後始末^{あとしまつ}をしてからのことに決めて、皆がそんなことに奔走している時、源氏は心経^{しんぎょう}を唱えながら、静かに考えてみるとあわただしい一日であった。月が出てきて海潮の寄せた跡が顕^{あら}わにながめられる。遠く退^のいてもまだ寄せ返^{かへ}しする浪^{なみ}の荒い海べのほうを戸をあけて源氏はながめていた。今日までのこと明日からのことを意識していて、対策を講じ合うに足るような人は近い世界に絶無であると源氏

は感じた。漁村の住民たちが貴人の居所を気にかけて、集まって来て訳のわからぬ言葉でしゃべり合っているのも礼儀のないことであるが、それを追い払う者すらない。

「あの大風がもうしばらくやまなかつたら、潮はもつと遠くへまで上って、この辺なども形を残していまい。やはり神様のお助けじゃ」

こんなことの言われているのも聞く身にとっては非常に心細いことであつた。

海にます神のたすけにかからずば潮の八百会やほあひにさすらへなまし

と源氏は口にした。終日風の揉もみ抜いた家にいたのであるから、源氏も疲労して思わず眠つた。ひどい場所であつたから、横になつたのではなく、ただ物によりかかつて見る夢に、お亡なくなりになつた院がはいっておいでになつたかと思うと、すぐそこへお立ちになつて、

「どうしてこんなひどい所にいるか」

こうお言いになりながら、源氏の手を取って引き立てようとあそばされる。

「住吉の神が導いてくださるのについて、早くこの浦を去ってしまうがよい」

と仰せられる。源氏はうれしくて、

「陛下とお別れいたしましてからは、いろいろと悲しいことばかりがございますから私はもうこの海岸で死のうかと思ひます」

「とんでもない。これはね、ただおまえが受けるちよつとしたことの報いにすぎないのだ。私は位にいる間に過失もなかったつもりであつたが、犯した罪があつて、その罪の贖いをする間は忙しくてこの世を顧みる暇がなかったのだが、おまえが非常に不幸で、悲しんでいるのを見ると堪えられなくて、海の中を来たり、海海を通つたりまったく困つたがやつとここまで来ることができた。このついでに陛下へ申し上げることがあるから、すぐに京へ行く」

と仰せになつてそのまま行つておしまいになろうとした。源氏は悲しくて、

「私もお供してまいります」

と泣き入つて、父帝のお顔を見上げようとした時に、人は見えないで、月の顔だけきらきらとして前にあつた。源氏は夢とは思われないで、まだ名残がそこらに漂つているように思われた。空の雲が身にしむように動いてもいるのである。長い間夢の中で見ることもできなかった恋しい父帝をしばらくだけではあつたが明瞭に見ることのでき

た、そのお顔が面影に見えて、自分がこんなふう不幸の底に落ちて、生命いのちも危うくなつたのを、助けるために遠い世界からおいになつたのであらうと思うと、よくあの騒ぎがあつたことであると、こんなことを源氏は思うようになつた。なんとなく力がついてきた。その時は胸がはつとした思いでいっぱいになつて、現実の悲しいことも皆忘れていたが、夢の中でももう少しお話をすればよかつたと飽き足らぬ氣のする源氏は、もう一度続きの夢が見られるかとわざわざ寝入ろうとしたが、眠りえないままで夜明けになつた。

渚なぎさのほうに小さな船を寄せて、二、三人が源氏の家のほうへ歩いて來た。だれかと山莊さきのはりまのかみの者が問うてみると、明石あかしの浦から前播磨守入道さきのはりまのかみが船で訪ねたずて來ていて、その使つかひとして來た者であつた。

「源少納言げんさんがいられましたら、お目にかかつて、お訪ねいたしました理由を申し上げます」

と使つかひは入道の言葉を述べた。驚おどろいていた良清よしきよは、

「入道は播磨での知人で、ずっと以前から知っておりますが、私との間には双方で感情の害つきあひされていることがあつて、格別に交際つきあひをしなくなっております。それが風波の害の

あつた際に何を言つて来たのでしょうか」

と言つて訳がわからないふうであつた。源氏は昨夜の夢のことが胸中にあつて、

「早く逢^あつてやれ」

と言つたので、良清^{よしきよ}は船へ行つて入道に面会した。あんなにはげしい天気のとどろいて船が出されたのであろうと良清はまず不思議に思つた。

「この月一日の夜に見ました夢で異形^{いぎよう}の者からお告げを受けたのです。信じがたいこととは思いましたが、十三日が来れば明瞭になる、船の仕度^{したく}をしておいて、必ず雨風がやんだら須磨の源氏の君の住居^{すまい}へ行けというようなお告げがありましたから、試みに船の用意をして待つていますと、たいへんな雨風でしょう、そして雷^{かみなり}でしょう、支那^{しな}などでも夢の告げを信じてそれで国難を救うことができたりした例もあるのですから、こちら様ではお信じにならなくても、示しのあつた十三日にはこちらへ伺つてお話だけは申し上げようと思ひまして、船を出してみますと、特別なような風が細く、私の船だけを吹き送つてくれますような風でこちらへ着きましたが、やはり神様の御案内だつたと思います。何かこちらでも神の告げというようなことがなかつたでしょうか、と申すことを失礼ですがあなたからお取り次ぎくださいませんか」

と入道は言うのである。良清はそつと源氏へこのことを伝えた。源氏は夢も現実も静かでなく、何かの暗示らしい点の多かったことを思つて、世間の譏りそしなどばかりを氣にかけ神の冥助みやうじよにそむくことをすれば、またこれ以上の苦しみを見る日が来るであろう、人間を怒らせることすら結果は相当に恐ろしいのである、氣の進まぬことも自分より年長者であつたり、上の地位にいる人の言葉には随うしたがべきである。退いて咎とがなしと昔の賢人も言った、あくまで謙遜けんそんであるべきである。もう自分は生命いのちの危あぶないほどの目を幾つも見せられた、臆病おくひようであつたと言われることを不名誉だと考える必要もない。夢の中でも父帝は住吉すみよしの神のことを仰せられたのであるから、疑うことは一つも残つていないと思つて、源氏は明石へ居を移す決心をして、入道へ返辞を伝えさせた。

「知るべのない所へ来まして、いろいろな災厄さいやくにあつていまして、京のほうからは見舞いを言い送ってくれる者もありませんから、ただ大空の月日だけを昔馴染なしみの物と思つてながめているのですが、今日船を私のために寄せてくださつてありがたく思ひます。明石には私の隠栖いんせいに適した場所があるでしょうか」

入道は申し入れの受けられたことを非常によろこんで、恐縮の意を表してきた。ともかく夜が明けきらぬうちに船へお乗りになるがよいということになって、例の四、五人

だけが源氏を護まもつて乗船した。入道の話のような清い涼しい風が吹いて来て、船は飛ぶように明石へ着いた。それはほんの短い時間のことであったが不思議な海上の氣であった。

明石の浦の風光は、源氏がかねて聞いていたように美しかった。ただ須磨に比べて住む人間の多いことだけが源氏の本意に反したことのようである。入道の持つている土地は広くて、海岸のほうにも、山手のほうにも大きな邸宅があった。渚なぎさには風流な小亭しょうていが作っており、山手のほうには、溪流けいりゅうに沿った場所に、入道がこもって後世ごせの祈りをする三昧堂さんまいどうがあつて、老後のために蓄積してある財物のための倉庫町もある。高潮を恐れてこのごろは娘その他の家族は山手の家のほうに移らせてあつたから、浜のほうの本邸に源氏一行は氣樂に住んでいことができるのであつた。船から車に移るころによりやく朝日が上つて、ほのかに見ることのできた源氏の美貌びぼうに入道は老いを忘れることもでき、命も延びる氣がした。満面に笑えみを見せてまず住吉の神をはるかに拝んだ。月と日を掌てのひらの中に得たような喜びをして、入道が源氏を大事がるのはもつともなことである。おのずから風景の明媚めいびな土地に、林泉の美が巧みに加えられた庭が座敷の周囲にあつた。入り江の水の姿の趣などは想像力の乏しい画家には描かけられないであろうと思われ

た。須磨の家に比べるとここは非常に明るくて朗らかであった。座敷の中の設備にも華奢やが尽くされてあった。生活ぶりは都の大貴族と少しも変わっていないのである。それよりもまだ派手はでなところが見えないでもない。

明石へ移って来た初めの落ち着かぬ心が少しなおってから、源氏は京へ手紙を書いた。

「こんなことになろうとは知らずに来て、ここで死ぬ運命だった」

などと言つて、悲しんでいた京の使いが須磨にまだいたのを呼んで、過分な物を報酬に与えた上で、京でするいろいろの用が命ぜられた。頼みつけの祈りの僧たちや寺々へはこの間からのことが言いやられ、新たな祈りが依頼されたのである。私人には入道の宮へだけ、稀有けうにして命をまつとうした須磨の生活の終わりを源氏はお知らせした。二条の院の憐あわれな手紙の返事は一気に書かれずに、一章を書いては泣き一章を書いては涙を拭ふきして書いている様子にも源氏がその人を思う深さが見られるのであった。

あとへあとへと悲しいことが起こってきて、もう苦しい経験はし尽くしたような私ですからしきりに出家したい心も湧わきますが、鏡を見てもとお言いになったあなたの面影が目を離れないのですから、あなたに再会をしないでは、それを実行することもで

きません。何の苦しみよりも私にはあなたと離れている苦痛が最もつらいことだと思います。あなたにまた逢うことができれば、ほかのいとわしいことは皆忍んでいこうと思います。

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦より遠に浦づたひして

まだ夢の続きで、明石の浦にまで来ているような気がしてなりません。こんな時に書く手紙はまちがったこともあるでしょうが許してください。

正しくは書かれずに乱れ書きになっているような美しい手紙を、横から見ていて、源氏が二条の院の夫人を愛する深さを惟光^{これみつ}たちは思った。そうした人たちもわが家への音信をこの使いへ託した。あの晴れ間もないようだった天気は名残^{なごり}なく晴れて、明石の浦の空は澄み返っていた。ここの漁業をする人たちは得意そうだった。須磨は寂しく静かで、漁師の家もまばらにしかなかったのである。最初ここへ来た時にはそれと変わった漁村のにぎやかに見えるのを、いとわしく思った源氏も、ここにはまた特殊ないろいろのよさのあるのが、発見されていていつて慰んでいた。

主人あるじの入道は信仰生活をする精神的な人物で、俗氣ぞっけのない愛すべき男であるが、溺愛できあいする一人娘のことでは、源氏の迷惑に思うことを知らずに、注意を引こうとする言葉もおりおり洩もらすのである。源氏もかねて興味を持つて噂うわさを聞いていた女であったから、こんな意外な土地へ来ることになったのは、その人との前生の縁に引き寄せられているのではないかとも思うことはあるが、こうした境遇にいる間は仏勤め以外のことに心をつかうまい。京の女王にょおうに聞かれてもやましくない生活をしているのとは違って、そうなれば誓ってきたことも皆嘘うそにとられるのが恥ずかしいと思って、入道の娘に求婚的な態度をとるようなことは絶対にしなかった。何かのことに触れては平凡な娘ではなさそうであると心の動いて行くことはないのではなかった。源氏のいる所へは入道自身すら遠慮をあまり近づいて来ない。ずっと離れた仮屋建てのほうに詰めきっていた。心の中では美しい源氏を始終見ていたくてならないのである。ぜひ希望することを実現させたいと思つて、いよいよ仏神を念じていた。年は六十くらいであるがきれいな老人で、仏勤めに痩やせて、もとの身柄のよいせいであるか、頑固がんこな、そしてまた老いぼけたようなところもありながら、古典的な趣味がわかつていて感じはきわめてよい。素養も相当にあることが何かの場合に見えるので、若い時に見聞したことを語らせて聞くことで源

氏のつれづれさも紛れることがあった。昔から公人として、私人として少しの閑暇ひまもない生活をしていた源氏であつたから、古い時代にあつた実話などをぼつぼつと少しずつ話してくれる老人のあることは珍重すべきであると思つた。この人に逢わなかつたら歴史の裏面にあつたようなことはわからないでしまつたかもしれぬとまでおもしろく思われることも話の中にはあつた。こんなふうで入道は源氏に親しく扱われているのであるが、この氣け高い貴人に対しては、以前はあんなに独り決ひとめをしていた入道ではあつても、無遠慮に娘の婿になつてほしいなどとは言い出せないのを、自身で齒がゆく思つては妻と二人で歎なげいていた。娘自身も並み並みの男さえも見ることの稀まれな田舎いなかに育つて、源氏を隙見すきみした時から、こんな美貌びぼうを持つ人もこの世にはいるのであつたかと驚歎きょうたんはしたが、それによつていよいよ自身とその人との懸隔けんかくを明瞭めいりょうに悟ることになつて、恋愛の対象などにすべきでないと思つていた。親たちが熱心にその成立を祈つてゐるのを見聞きしては、不似合ふにがひいなことを思うものであると見てゐるのであるが、それとともに低い身のほどの悲しみを覚え始めた。

四月になつた。衣がえの衣服、美しい夏の帳とばりなどを入道は自家で調製した。よけいなことをするものであるとも源氏は思うのであるが、入道の思い上がった人品に対しては

何とも言えなかった。京からも始終そうした品物が届けられるのである。のどかな初夏の夕月夜に海上が広く明るく見渡される所にいて、源氏はこれを二条の院の月夜の池のように思われた。恋しい紫の女王にょおうがいるはずでいてその人の影すらもない。ただ目の前にあるのは淡路あわじの島であった。「泡あわとはるかに見し月の」などと源氏は口ずさんでいた。

泡と見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月

と歌ってから、源氏は久しく触れなかった琴を袋から出して、はかないふうに弾ひいていた。惟光これみつたちも源氏の心中を察して悲しんでいた。源氏は「広陵しゅうりょう」という曲を細やかに弾いているのであった。山手の家のほうへも松風と波の音に混じって聞こえてくる琴の音に若い女性たちは身にしむ思いを味わったことであろうと思われる。名手の弾く琴も何も聞き分けえられそうにない土地の老人たちも、思わず外へとび出して来て浜風を引き歩いた。入道も供養法を修していたが、中止することにして、急いで源氏の居間へ来た。

「私は捨てた世の中がまた恋しくなるのではないかと思われますほど、あなた様の琴の音で昔が思い出されます。また死後に参りたいと願っております世界もこんなのではないかという気もいたされる夜でございます」

入道は泣く泣くほめたたえていた。源氏自身も心に、おりおりの宮中の音楽の催し、その時のだれの琴、だれの笛、歌手を勤めた人の歌いぶり、いろいろ時々につけて自身の芸のもてはやされたこと、帝をはじめとして音楽の天才として周囲から自身に尊敬の寄せられたことなどについての追憶がこもこも起こってきて、今日は見がたい他の人も、不運な自身の今も深く思えば夢のような気ばかりがして、深刻な愁^{うれ}いを感じながら弾いているのであったから、すごい音楽といってよいものであった。老人は涙を流しながら、山手の家から琵琶^{びわ}と十三絃^{げん}の琴を取り寄せて、入道は琵琶法師然とした姿で、おもしろくて珍しい手の一つ二つ弾いた。十三絃を源氏の前に置くと源氏はそれも少し弾いた。また入道は敬服してしまった。あまり上手^{じょうず}がする音楽でなくとも場所場所で感じ深く思われることの多いものであるから、これははるかに広い月夜の海を前にして春秋の花紅葉^{もみじ}の盛りに劣らないいろいろの木々の若葉がそこに盛り上がっていて、そのまた陰影の地に落ちたところなどに水鶏^{くいな}が戸をたたく音に似た声で鳴いているのもおもし

ろい庭も控えたこうした所で、優秀な楽器に対していることに源氏は興味を覚えて、
「この十三絃という物は、女が柔らかみをもつてあまり定まら^きないふう^きに弾いたのが、
おもしろくていいのです」

などと言っていた。源氏の意はただおおまかに女ということであつたが、入道は訳もなくうれしい言葉を聞きつけたように、笑^えみながら言う、

「あなた様があそばす以上におもしろい音^ねを出しうるものがどこにございましょう。私は延喜^{えんぎ}の聖帝から伝わりまして三代目の芸を継いだ者でございますが、不運な私は俗界のこととともに音楽もいったんは捨ててしまったのでございましたが、憂鬱^{ゆううつ}な気分になつております時などに時々弾いておりますのを、聞き覚えて弾きます子供が、どうしたのでございますか私の祖父の親王によく似た音を出します。それは法師の僻耳^{ひがみみ}で、松風の音をそう感じているのかもしれないが、一度お聞きに入りたいものでござい^すす」

興奮して慄^{ふる}えている入道は涙もこぼしているようである。

「松風が邪魔^{じやま}をしそうな所で、よくそんなにお稽古^{けいこ}ができたものですね、うらやましいことですよ」

源氏は琴を前へ押しやりながらまた言葉を続けた。

「不思議に昔から十三絃の琴には女の名手が多いようです。嵯峨帝のお伝えで女五の宮が名人でおりになったそうですが、その芸の系統は取り立てて続いていると思われる人が見受けられない。現在の上手じょうずというのは、ただちよつとその場きりな巧みさだけしかないようですが、ほんとうの上手がこんな所に隠されているとはおもしろいことですね。ぜひお嬢さんのを聞かせていただきたいものです」

「お聞きくださいますのに何の御遠慮もいることではございません。おそばへお召しになりまして済むことでございます。潯陽江しんようこうでは商人のためにも名曲をかなでる人があつたのでございますから。そのまた琵琶と申す物はやっかいなものでございまして、昔にもあまり琵琶の名人という者はなかつたようでございますが、これも宅の娘はかなりすららと弾きこなします。品のよい手筋が見えるのでございます。どうしてその域に達しましたか。娘のそうした芸をただ荒い波の音が合奏してくるばかりの所へ置きますことは私として悲しいことに違いございませんが、不快なことのあつたりいたします節にはそれを聞いて心の慰めにいたすこともございます」

音楽通の自信があるような入道の言葉を、源氏はおもしろく思つて、今度は十三絃を

入道に与えて弾かせた。實際入道は玄人らしく弾く。現代では聞けないような手も出てきた。弾く指の運びに唐風が多く混じっているのである。左手でおさえて出す音などにはことに深く出される。ここは伊勢の海ではないが「清き渚に貝や拾はん」という催馬樂を美音の者に歌わせて、源氏自身も時々拍子を取り、声を添えることがあると、入道は琴を弾きながらそれをほめていた。珍しいふうに作られた菓子も席上に出て、人々には酒も勧められるのであったから、だれの旅愁も今夜は紛れてしまいそうであった。夜がふけて浜の風が涼しくなった。落ちようとする月が明るくなって、また静かな時に、入道は過去から現在までの身の上話をしだした。明石へ来たところに苦勞のあったこと、出家を遂げた経路などを語る。娘のことも問わず語りにする。源氏はおかしくもあるが、さすがに身にしむ節もあるものであった。

「申し上げていくことではございますが、あなた様 생각이がなくこの土地へ、仮にもせよ移っておいでになることになりましたのは、もしかいたしますと、長年の間老いた法師がお祈りいたしております神や仏が憐みを一家におかけくださいまして、それでしばらくこの僻地へあなた様がおいでになったのではないかと思われます。その理由は住吉の神をお頼み申すことになりました十八年になるのでございます。女の子の小さい時

から私は特別なお願いを起こしまして、毎年の春秋に子供を住吉へ参詣さんけいさせることにいたしております。また昼夜に六回の仏前のお勤めをいたしますのにも自分の極樂往生はさしおいて私はただこの子によい配偶者を与えたまえと祈っております。私自身は前生の因縁が悪くて、こんな地方人に成り下がっておりますも、親は大臣にもなった人でございます。自分はこの地位に甘んじていまして子もまたこれに準じたほどの者にしかたれませんでは、孫、曾孫そうぞんの末は何になることであろうと悲しんでおりましたが、この娘は小さい時から親に希望を持たせてくれました。どうかして京の貴人に娶めとつていただきたいと思ひます心から、私どもと同じ階級の者の間に反感を買い、敵を作りましたし、つらい目にもあわされましたが、私はそんなことを何とも思っておりません。命のある限りは微力でも親が保護をしよう、結婚をさせないまままで親が死ねば海へでも身を投げてしまえと私は遺言がしてございます」

などと書き尽くせないほどのことを泣く泣く言うのであった。源氏も涙ぐみながら聞いていた。

「冤罪えんざいのために、思いも寄らぬ国へ漂泊さまよつて来ていますことを、前生に犯したどんな罪によつてであるかとわからなく思っておりますが、今晚のお話で考え合わせますと、

深い因縁によつてのことだったとはじめて気がつかれます。なぜ明瞭にわかつておいでになったあなたが早く言つてくださらなかったのでしょうか。京を出ました時から私はもう無常の世が悲しくて、信仰のこと以外には何も思わずに時を送っていました。いつかそれが習慣になつて、若い男らしい望みも何もなくなつておりました。今お話のようなお嬢さんのいられるということだけは聞いていましたが、罪人にされている私を不吉にお思ひになるだろうと思ひまして希望もかけなかったのですが、それではお許しくださるのですね、心細い独り住みの心が慰められることでしょう」

などと源氏の言つてくれるのを入道は非常に喜んでいた。

「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうら寂しさを

私はまた長い間口へ出してお願いすることができませんで悶々としておりました」
こう言うのに身は慄ふるわせているが、さすがに上品なところはあつた。

「寂しいと言つてもあなたはもう法師生活に慣れていらつしやるのですから」
それから、

旅衣うら悲しさにあかしかね草の枕は夢も結ばずまくら

戯談まじりに言う、源氏にはまた平生入道の知らない愛嬌が見えた。入道はなおい
ろと娘について言っていたが、読者はうるさいであろうから省いておく。まちがつて
書けばいっそう非常識な入道に見えるであろうから。

やっと思いがかなった気がして、涼しい心に入道はなっていた。その翌日の昼ごろに
源氏は山手の家へ手紙を持たせてやることにした。ある見識をもつ娘らしい、かえって
こんなところに意外なすぐれた女がいるのかもしれないからと思って、心づかいをしな
がら手紙を書いた。朝鮮紙の胡桃色くるみのものへきれいな字で書いた。

遠近をらちもしらぬ雲井に眺めわびかすめし宿の梢しずえをぞとふ

思うには。（思ふには忍ぶることぞ負けにける色に出でじと思ひしものを）

こんなものであったようである。人知れずこの音信を待つために山手の家へ来ていた
入道は、予期どおりに送られた手紙の使いを大騒ぎしてもてなした。娘は返事を容易に

書かなかった。娘の居間へはいって行つて勸めても娘は父の言葉を聞き入れない。返事を書くのを恥ずかしくきまり悪く思われるのといつしよに、源氏の身分、自己の身分の比較される悲しみを心に持つて、気分が悪いと言つて横になつてしまった。これ以上勧められなくなつて入道は自身で返事を書いた。

もつたいないお手紙を得ましたことで、過分な幸福をどう処置してよいかわからぬふうでございます。

それをこんなふうには私は見るのでございます。

眺むらん同じ雲井を眺むるは思ひも同じ思ひなるらん

だろうと私には思われます。柄にもない風流氣を私の出しましたことをお許しく下さい。

とあつた。檀紙に古風ではあるが書き方に一つの風格のある字で書かれてあつた。なるほど風流氣を出したものであると源氏は入道を思い、返事を書かぬ娘には軽い反感が起こつた。使いはたいした贈り物を得て来たのである。翌日また源氏は書いた。

代筆のお返事などには必要がありません。
と書いて、

いぶせくも心に物を思ふかなやよやいかにと問ふ人もなみ

言うことを許されないのですから。

今度のは柔らかい薄様^{うすよう}へはなやかに書いてやった。若い女がこれを不感覚に見てしまったと思われるのは残念であるが、その人は尊敬してもつりあわぬ女であることを痛切に覚える自分を、さも相手らしく認めて手紙の送られることに涙ぐまれて返事を書く氣に娘はならないのを、入道に責められて、香のにおいの沁^しんだ紫の紙に、字を濃く淡^{うす}くして紛らすようにして娘は書いた。

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きか悩まん

手も書き方も京の貴女^{きよ}にあまり劣らないほど上手^{じょうず}であった。こんな女の手紙を見てい

ると京の生活が思い出されて源氏の心は楽しかったが、続いて毎日手紙をやることも人目がるさかったから、二、三日置きくらいに、寂しい夕方とか、物哀れな気のある夜明けとかに書いてはそつと送っていた。あちらからも返事は来た。相手をするに不足のない思い上がった娘であることがわかってきて、源氏の心は自然惹かれていくのであるが、良清が自身の縄張りなわばの中であるように言っていた女であったから、今眼前横取りする形になることは彼にかわいそうであるとなお躊躇ちゅうちよはされた。あちらから積極的な態度をとってくれば良清への責任も少なくなるわけであるからと、そんなことも源氏は期待していたが女のほうは貴女と言われる階級の女以上に思い上がった性質であったから、自分を卑しくして源氏に接近しようなどとは夢にも思わないのである。結局どちらが負けるかわからない。何ほども遠くなつてはいないのであるが、ともかくも須磨の関が中にあることになってからは、京の女王がいつそう恋しくて、どうすればいいことであろう、短期間の別れであるとも思つて捨てて来たことが残念で、そつとここへ迎えることを実現させてみようかと時々は思うのではあるが、しかしもうこの境遇に置かれていることも先の長いことと思われないうちになつて、世間体のよろしくないことはやはり忍ぶほうがよいのであるとして、源氏はしいて恋しさをおさえていた。

この年は日本に天変地異ともいふべきことがいくつも現われてきた。三月十三日の雷雨の烈はげしかった夜、帝みかどの御夢に先帝が清涼殿の階段きざはしの所へお立ちになって、非常に御機嫌ごきげんの悪い顔つきでおにらみになったので、帝がかしこまっておいでになると、先帝からはいろいろの仰せがあった。それは多く源氏のことが申されたい。おさめになったあとで帝は恐ろしく思召おもほしめした。また御子として、他界におわしましてなお御心労を負わせられることが堪えられないことであると悲しく思召した。太后へお話しになると、

「雨などが降って、天氣の荒れている夜などというものは、平生神経を悩ましていることが悪夢にもなって見えるものですから、それに動かされたと外へ見えるようなことはなさらないほうがよい。軽々しく思われます」

と母君は申されるのであった。おにらみになる父帝の目と視線をお合わせになったためでか、帝は眼病におかかりになって重くお煩わづらいになることになった。御謹慎的な精進を宮中でもあそばすし、太后の宮でもしておいでになった。また太政大臣が突然亡なくなった。もう高齢であつたから不思議でもないのであるが、そのことから不穏な空氣が世上に醸かもされていくことにもなったし、太后も何ということなしに寝ついておしまいになって、長く御平癒へいゆのことがない。御衰弱が進んでいくことで帝は御心痛をあそばされ

た。

「私はやはり源氏の君が犯した罪もないのに、官位を剥奪はくだつされているようなことは、われわれの上に報いてくることだろうと思います。どうしても本官に復させてやらねばなりません」

このことをたびたび帝は太后へ仰せになるのであった。

「それは世間の非難を招くことですよ。罪を恐れて都を出て行った人を、三年もたたないでお許しになつては天下の識者が何と言うでしょう」

などとお言いになつて、太后はあくまでも源氏の復職に賛成をあそばさないままで月日がたち、帝と太后の御病氣は依然としておよろしくないのであった。

明石ではまた秋の浦風の烈はげしく吹く季節になつて、源氏もしみじみ独棲ひとりずみの寂しさを感じるようであつた。入道へ娘のことをおり言い出す源氏であつた。

「目だたぬようにしてこちらの邸やしきへよこさせてはどうですか」

こんなふうに言っていて、自分から娘の住居すまいへ通つて行くことなどはあるまじいことのように思っていた。女にはまたそうしたことのできない自尊心があつた。田舎いなかの並み並みの家の娘は、仮に来て住んでいる京の人が誘惑すれば、そのまま軽率に情人にも

なってしまうのであるが、自身の人格が尊重されてかかったことではないのであるから、そのあとで一生物思いをする女になるようなことはいやである。不つりあいの結婚をありがたいことのように思つて、成り立たせようと心配している親たちも、自分が娘でいる間はいろいろな空想も作れていいわけなのであるが、そうなった時から親たちは別なつらい苦しみをするに違いない。源氏が明石に滞留している間だけ、自分は手紙を書きかわす女として許されるということがほんとうの幸福である。長い間噂^{うわさ}だけを聞いていて、いつの日にそうした方を隙見^{すきみ}することができると、はるかなことに思つていた方が思いがけなくこの土地へおいでになつて、隙見ではあつたがお顔を見ることができたし、有名な琴の音を聞くこともかない、日常の御様子も詳しく聞くことができる、その上自分へお心をお語りになるような手紙も来る。もうこれ以上を自分は望みたくない。こんな田舎に生まれた娘にこれだけの幸いのあつたのは確かに果報のあつた自分と思わなければならないと思つていたのであつて、源氏の情人になる夢などは見えないのである。親たちは長い間祈つたことの事実になろうとする時になつたことを知りながら、結婚をさせて源氏の愛の得られなかつた時はどうだろうと、悲惨な結果も想像されて、どんなりっぱな方であつても、その時は恨めしいことであらうし、悲しい

ことでもあろう、目に見ることもない仏とか神とかいうものにばかり信頼していたが、それは源氏の心持ちも娘の運命も考えに入れずにしていたことであつたなどと、今になつて二の足が踏まれ、それについてする煩悶はんもんもはなはだしかった。源氏は、

「この秋の季節のうちにお嬢さんの音楽を聞かせてほしいものです。前から期待していたのですから」

などとよく入道に言っていた。入道はそつと婚姻の吉日を暦で調べさせて、まだ心の決まらないように言っている妻を無視して、弟子でしにも言わずに自身でいろいろと仕度したくをしていた。そうして娘のいる家の設備を美しく整えた。十三日の月がはなやかに上つたころに、ただ「あたら夜の」(月と花とを同じくば心知られん人に見せばや)とだけ書いた迎えの手紙を浜の館やかたの源氏の所へ持たせてやつた。風流がちな男であると思ひながら源氏は直衣のうしをきれいに着かえて、夜がふけてから出かけた。よい車も用意されてあつたが、目だたせぬために馬で行くのである。惟光これみつなどばかりの一人二人の供をつれただけである。山手の家はやや遠く離れていた。途中の入り江の月夜の景色けしきが美しい。紫の女王にょおうが源氏の心に恋しかつた。この馬に乗つたままで京へ行つてしまいたい氣がした。

秋の夜の月毛の駒こまよ我が恋ふる雲井に駈かけれ時の間も見ん

と独言ひとりごちが出た。山手の家は林泉の美が浜の邸やしきにまさっていた。浜の館やかたは派手はでに作り、これは幽邃ゆうすいであることを主にしてあった。若い女のいる所としてはきわめて寂しい。こんな所においては人生のことが皆身にしむことに思えるであらうと源氏は恋人に同情した。三昧堂さんまいどうが近くて、そこで鳴らす鐘の音が松風に響き合って悲しい。岩にはえた松の形が皆よかった。植え込みの中にはあらゆる秋の虫が集まって鳴いているのである。源氏は邸内をしばらくあちらこちらと歩いてみた。娘の住居すまいになっている建物はことによく作られてあった。月のさし込んだ妻戸が少しばかり開かれてある。その縁へ上がつて、源氏は娘へものを言いかけた。これほどには接近して逢おうとは思わなかった娘であるから、よそよそしくしか答えない。貴族らしく気どる女である。もっとすぐれた身分の女でも今日までこの女に言い送ってあるほどの熱情を見せれば、皆好意を表するものであると過去の経験から教えられている。この女は現在の自分を侮あなづって見ているのではないかなどと、焦慮の中には、こんなことも源氏は思われた。力で勝つことは初めからの本意でもない、女の心を動かすことができずに帰るのは見苦しいとも思う源氏が追

い追いに熱してくる言葉などは、明石の浦でされることが少し場所違いでもつたいなく思われるものであった。几帳きちようの紐ひもが動いて触れた時に、十三絃げんの琴の緒おが鳴った。それによつてさつきまで琴などを弾ひいていた若い女の美しい室内の生活ぶりが想像されて、源氏はますます熱していく。

「今音が少ししたようですね。琴だけでも私に聞かせてくださいませんか」
とも源氏は言つた。

むつ言を語りあはせん人もがなうき世の夢もなかば覚さむやと

明けぬ夜にやがてまどへる心には何いづれを夢と分わきて語らん

前のは源氏の歌で、あとののは女の答えたものである。ほのかに言う様子は伊勢いせの御息みやすど所にころそっくり似た人であった。源氏がそこへはいつて来ようなどとは娘の予期しなかつたことであつたから、それが突然なことでもあつて、娘は立つて近い一つの部屋へはいつてしまった。そしてどうしたのか、戸はまたあけられないようにしてしまった。源氏はしいてはいろいろとする気にもなつていなかった。しかし源氏が躊躇ちゆうちよしたのはほんの

一瞬間のことで、結局は行く所まで行ってしまったわけである。女はやや背が高く、
氣高けだかい様子の受け取れる人であった。源氏自身の内にたいした衝動も受けていないでこ
うなつたことも、前生の因縁であろうと思うと、そのことで愛が湧わいてくるように思わ
れた。源氏から見て近まさりのした恋と言つてよいのである。平生は苦しくばかり思わ
れる秋の長夜もすぐ明けていく気がした。人に知らせたくないと思う心から、誠意のあ
る約束をした源氏は朝にならぬうちに歸つた。

その翌日は手紙を送るのに以前よりも人目がはばかられる氣もした。源氏の心の鬼か
らである。入道のほうでも公然のことにはしたくなくて、結婚の第二日の使いも、その
こととして派手はでに扱はうようなことはしなかった。こんなことにも娘の自尊心は傷つけら
れたようである。それ以後時々源氏は通つて行つた。少し道程みちのりのある所でもあつたか
ら、土地の者の目につくことも思つて間を置くのであるが、女のほうではあらかじめ愁うれ
えていたことが事実になつたように取つて、煩悶はんもんしているのを見ては親の入道も不安に
なつて、極樂の願なまいも忘れたように、仏勤めは怠なまけて、源氏の君の通つて来ることを大
事だと考えている。入道からいえば事が成就しているのであるが、その境地で新しく物
思いをしているのが憐あわれであつた。二条の院の女王にやおうにこの噂うわさが伝わつては、恋愛問題で

は嫉妬^{しつと}する価値のあることでないとわかっていても、秘密にしておく自分の態度を恨めしがられては苦しくもあり、気恥ずかしくもあると思っていた源氏が紫夫人をどれほど愛しているかはこれだけでも想像することができるのである。女王も源氏を愛することの深いだけ、他の愛人との関係に不快な色を見せたそのおりおりのことを今思い出して、なぜつまらぬことで恨めしい心にさせたかと、取り返したいくらいにそれを後悔している源氏なのである。新しい恋人は得ても女王へ焦^{こが}れている心は慰められるものでもなかったから、平生よりもまた情けのこもった手紙を源氏は京へ書いたのであるが、奥に今度のことを書いた。

私は過去の自分のしたことではあるが、あなたを不快にさせたつまらぬいろいろな事件を思い出しては胸が苦しくなるのですが、それなのにまたここでよいな夢を一つ見ました。この告白でどれだけあなたに隔てのない心を持っているかを思ってみてください。「誓ひしことも」（忘れじと誓ひしことをあやまたば三笠^{みかさ}の山の神もことわれ）という歌のように私は信じています。

と書いて、また、

何事も、

しほしほと先^まづぞ泣かるるかりそめのみるめは海^{あま}人のすさびなれども

と書き添えた手紙であつた。

京の返事は無邪気な可^{かれん}憐なものであつたが、それも奥に源氏の告白による感想が書かれてあつた。

お言いにならないではいらつしやれないほど現在のお心を占めていますことをお報^しらせくださいまして承知いたしましたが、私には新しい恋人に傾倒していらつしやる御様子が昔のいろいろな場合と思ひ合せて想像することもできます。

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと

おおようではあるがくやしいと思う心も確かにかすめて書かれたものであるのを、源氏は哀れに思つた。この手紙を手から離しがたくじつとながめていた。この当座幾日は山手の家へ行く気もしなかつた。女は長い途絶えを見て、この予感はずでに初めからあつたことであると歎^{なげ}いて、この親子の間では最後には海へ身を投げればよいと言

葉が以前によく言われたものであるが、いよいよそうしたいほどつらく思った。年取った親たちだけをたよりにして、いつ人並みの娘のような幸福が得られるものとも知れなかった過去は、今に比べて懊悩おうのうの片はしも知らない自分だった。世の中のことはこんなに苦しいものであるうか、恋愛も結婚も処女の時に考えていたより悲しいものであると、女は心に思いながらも源氏には平静なふうを見せて、不快を買うような言動もしない。源氏の愛は月日とともに深くなっていくのであるが、最愛の夫人が一人京に残っていて、今の女の関係をいろいろに想像すれば恨めしい心が動くことであろうと思われる苦しさから、浜の館やかたのほうで一人寝をする夜のほうが多かった。

源氏はいろいろに絵を描かいて、その時々的心を文章にしてつけていった。京の人に訴える気持ちで描かいているのである。女王の返辞がこの絵巻から得られる期待で作られているのであった。感傷的な文学および絵画としてすぐれた作品である。どうして心が通じたのか二条の院の女王もものの身にしむ悲しい時々、同じようにいろいろの絵を描かいていた。そしてそれに自身の生活を日記のようにして書いていた。この二つの絵巻の内容は興味の多いものに違いない。

春になったが帝みかどに御悩ごのうがあつて世間も静かでない。当帝の御子は右大臣むすめの女じようきやうでんの承香殿

の女御にょぎの腹に皇子があつた。それはやつとお二つの方であつたから当然東宮へ御位みくらひはお譲りになるのであるが、朝廷の御後見をして政務を総括的に見る人物にだれを決めてよいかと帝はお考えになつた末、源氏の君を不運の中に沈淪ちんりんさせておいて、起用しないことは国家の損失であると思召おもほしめして、太后が御反対になつたにもかかわらず赦免の御沙汰が、源氏へ下ることになつた。去年から太后も物怪もののけのために病んでおいでになり、そのほか天の諭さとしめいたことがしきりに起こることもあつたし、祈祷きとうと御精進しやうじんで一時およろしかった御眼疾もまたこのごろお悪くばかりなつていくことに心細く思召して、七月二十幾日に再度御沙汰ごさたがあつて、京へ帰ることを源氏は命ぜられた。いずれはそうなることと源氏も期していたものではあるが、無常の人生であるから、それがまたどんな変わったことになるかもしれないと不安がないでもなかつたのに、にわかな宣旨せんじで帰洛きらくのことの決まつたのはうれしいことではあつたが、明石あかしの浦を捨てて出ねばならぬことは相当に源氏を苦しませた。入道も当然であると思ひながらも、胸ふたに蓋ふたがされたほど悲しい気持ちもするのであつたが、源氏が都合よく栄えねば自分のかねての理想は実現されないものであるからと思ひ直した。

その時分は毎夜山手の家へ通う源氏であつた。今年の六月ごろから女は妊娠してい

た。別離の近づくことによつてあやなくなつてもよいように源氏は女を深く好きになつた。どこまでも恋の苦から離れられない自分なのであらうと源氏は煩悶はんもんしていた。

女はもとより思い乱れていた。もつともなことである。思いがけぬ旅に京は捨ててもまた帰る日のないことなどは源氏の思わなかつたことであつた。慰める所がそれにはあつた。今度は幸福な都へ帰るのであつて、この土地との縁はこれで終わると見ねばならないと思うと、源氏は物哀れでならなかつた。侍臣たちにも幸運は分かたれていて、だれもおどる心を持っていた。京の迎えの人たちもその日からすぐに下つて来た者が多数にあつて、それらも皆人生が楽しくばかり思われるふうであるのに、主人の入道だけは泣いてばかりいた。そして七月が八月になつた。色の身にしむ秋の空をながめて、自分は今も昔も恋愛のために絶えない苦を負わされる、思い死にもしなければならぬようにと源氏は思い悶もたえていた。女との關係を知っている者は、

「反感が起こるよ。例のお癖だね」

と言つて、困つたことだと思つていた。源氏が長い間この關係を秘密にしていゝて、人目を紛らして通つていたことが近ごろになつて人々にわかつたのであつたから、

「女からいえば一生の物思いを背負い込んだやうなものだ」

とも言ったりした。少納言がよく話していた女であるともその連中が言っていた時、良清は少しくやさしかった。

出発が明後日に近づいた夜、いつもよりは早く山手の家へ源氏は出かけた。まだはつきりとは今日までよく見なかった女は、貴女らしい気高い様子が見えて、この身分にふさわしくない端麗さが備わっていた。捨てて行きがたい気がして、源氏はなんらかの形式で京へ迎えようという気になったのであった。そんなふうに言って女を慰めていた。女からもつくづくと源氏の見られるのも今夜がはじめてであった。長い苦勞のあとは源氏の顔に痩せが見えるのであるが、それがまた言いようもなく艶であった。あふれるような愛を持って、涙ぐみながら将来の約束を女にする源氏を見ては、これだけの幸福をうければもうこの上を願わないであきらめることもできるはずであると思われるのであるが、女は源氏が美しければ美しいだけ自身の価値の低さが思われて悲しいのであった。秋風の中で聞く時にことに寂しい波の音がする。塩を焼く煙がうつすり空の前に浮かんでいて、感傷的にならざるをえない風景がそこにはあった。

このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じ方になびかん

と源氏が言うのと、

かきつめて海人の焼く藻の思ひにも今はかひなき恨みだにせじ

とだけ言つて、可憐なふう泣いて多くは言わないのであるが、源氏に時々答える言葉には情のこまやかさが見えた。源氏が始終聞きたく思つていた琴を今日まで女の弾こうとしなかったことを言つて源氏は恨んだ。

「ではあとであなたに思い出してもらうために私も弾くことにしよう」

と源氏は、京から持つて来た琴を浜の家へ取りにやつて、すぐれたむずかしい曲の一節を弾いた。深夜の澄んだ氣の中であつたから、非常に美しく聞こえた。入道は感動して、娘へも促すように自身で十三絃の琴を几帳の中へ差し入れた。女もとめどなく流れる涙に誘われたように、低い音で弾き出した。きわめて上手である。入道の宮の十三絃の技は現今第一であると思うのは、はなやかにきれいな音で、聞く者の心も朗らかになつて、弾き手の美しさも目に髣髴と描かれる点などが非常な名手と思われる点である。これはあくまでも澄み切つた芸で、真の音楽として批判すれば一段上の技倆がある。

とも言えると、こんなふうに源氏は思った。源氏のような音楽の天才である人が、はじめて味わう妙味であると思うような手もあった。飽満するまでには聞かせずにやめてしまったのであるが、源氏はなぜ今日までにしても弾かせなかったかと残念でならない。熱情をこめた言葉で源氏はいろいろに将来を誓った。

「この琴はまた二人で合わせて弾く日まで形見にあげておきましょう」
と源氏が琴のことを言うと、女は、

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけてしのばん

言うともなくこう言うのを、源氏は恨んで、

逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変はらざらん

と言ったが、なおこの琴の調子が狂わない間に必ず逢おうとも言いなだめていた。信頼はしていても目の前の別れがただただ女には悲しいのである。もつともなことと言わ

ねばならない。

もう出立の朝になって、しかも迎えの人たちもおおぜい来ている騒ぎの中に、時間と人目を盗んで源氏は女へ書き送った。

うち捨てて立つても悲しき浦波の名残なごりいかにと思ひやるかな

返事、

年経つる苦屋とまやも荒れてうき波の帰る方にや身をたぐへまし

これは実感そのまま書いただけの歌であるが、手紙をながめている源氏はほろほろと涙をこぼしていた。女の関係を知らない人々はこんな住居すまいも、一年以上いられて別れて行く時は名残があれほど惜しまれるものなのであろうと単純に同情していた。良清などはよほどお気に入った女なのであろうと憎く思った。侍臣たちは心中のうれしさをおさえて、今日限りに立って行く明石の浦との別れに湿っぱい歌を作りもしていたが、それ

は省いておく。

出立の日の饗応きやうわうを入道は派手はでに設けた。全体の人へ餞別せんべつにりっぱな旅装一揃そろいずつを出すこともした。いつの間にこの用意がされたのであるかと驚くばかりであった。源氏の衣服はもとより質を精選して調製してあった。幾個かの衣櫃ころもびつが列に加わって行くことになっているのである。今日着て行く狩衣かりぎぬの一所に女の歌が、

寄る波にたち重ねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん

と書かれてあるのを見つけて、立ちぎわではあったが源氏は返事を書いた。

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を

というのである。

「せっかくよこしたのだから」

と言いながらそれに着かえた。今まで着ていた衣服は女の所へやった。思い出させる

恋の技巧というものである。自身のおいの沁しんだ着物がどれだけ有効な物であるかを源氏はよく知っていた。

「もう捨てました世の中ですが、今日のお送りのできませんことだけは残念です」
などと言っている入道が、両手で涙を隠しているのがかわいそうであると源氏は思ったが、他の若い人たちの目にはおかしかつたに違いない。

「世をうみにこらしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね

子供への申しわけにせめて国境まではお供をさせていただきます」

と入道は言ってから、

「出すぎた申し分でございますが、思い出しておやりくださいます時がございましたら御音信をいただかせてくださいませ」

などと頼んだ。悲しそうで目のあたりの赤くなっている源氏の顔が美しかった。

「私には当然の義務であることもあるのですから、決して不人情な者でないとすぐにまたよく思っていたくような日もあるでしょう。私はただこの家と離れることが名残惜なごり

しくてならない、どうすればいいことなんだか」

と言つて、

都^い出^ででし春^{はる}の歎^{なげ}きに劣^せらめや年^{とし}ふる浦^{うら}を別^{わか}れぬる秋

と涙^{なみだ}を袖^{そで}で源^{げん}氏は拭^{ぬぐ}つていた。これを見ると入道^{にゅうだう}は氣も遠^{とほ}くなつたように萎^{しお}れてしまつた。それきり起居^{たちい}もよろよとするふうである。明石^{あかし}の君^{きみ}の心は悲^{かな}しみに満^みたされていた。外^{そと}へは現^{あらわ}わすまいとするのであるが、自身^{みづか}の薄^は倖^{こう}であることが悲^{かな}しみの根本^{こんぽん}になつていて、捨^すてて行く恨^{うら}めしい源^{げん}氏がまた恋^{こひ}しい面影^{おもかげ}になつて見えるせつなさは、泣いて僅^{わずか}かに洩^もらすほかはどうしようもない。母^{はは}の夫人^{ふじん}もなだめかねていた。

「どうしてこんなに苦^{くる}勞^{らう}の多い結^{むす}婚^{こん}をさせたらう。固^{かた}意^い地^じな方^{かた}の言^{こと}いなり私^{わたし}までもがついて行^いつたのがまちがいだつた」

と夫人^{たんとく}は歎^{なげ}息^{いき}していた。

「うるさい、これきりにあそばされないことも残^{のこ}っているのだから、お考^{かんが}えがあるに違^{ちが}いない。湯^ゆでも飲^のんでまあ落^おち着^ききなさい。ああ苦^{くる}しいことが起^{おこ}つてきた」

入道はこう妻と娘に言つたままで、室の片隅に寄つていた。妻と乳母とが口々に入道を批難した。

「お嬢様を御幸福な方にしてお見上げしたいと、どんなに長い間祈つて来たことでしよう。いよいよそれが実現されますことかと存じておりましたのに、お氣の毒な御経験をあそばすことになつたのでございますね。最初の御結婚で」

こう言つて歎く人たちもかわいそうに思われて、そんなこと、こんなことで入道の心は前よりずっとぼけていった。昼は終日寝ているかと思うと、夜は起き出して行く。

「数珠の置き所も知れなくしてしまつた」

と両手を擦り合わせて絶望的な歎息をしているのであつた。弟子たちに批難されては月夜に出て御堂の行道をするが池に落ちてしまう。風流に作つた庭の岩角に腰をおろしそこねて怪我をした時には、その痛みのある間だけ煩悶をせずにはいた。

源氏は浪速に船を着けて、そこで祓いをした。住吉の神へも無事に帰洛の日の来た報告をして、幾つかの願を實行しようと思ふ意志のあることも使いに言わせた。自身は参詣しなかつた。途中の見物などもせずすぐに京へはいつたのであつた。

二条の院へ着いた一行の人々と京にいた人々は夢心地で逢い、夢心地で話を取りかわ

された。喜び泣きの声も騒がしい二条の院であった。紫夫人も生きがいなく思っていた命が、今日まであって、源氏を迎ええたことに満足したことであろうと思われる。美しかった人のさらに完成された姿を二年半の時間ののちに源氏は見ることができたのである。寂しく暮らした間に、あまりに多かった髪量の少し減ったまでもがこの人をより美しく思わせた。こうしてこの人と永久に住む家へ帰つて来ることができたのであると、源氏の心の落ち着いたのと同時に、またも別離を悲しんだ明石の女がかわいそうに思いやられた。源氏は恋愛の苦にどこまでもつきまとわれる人のようである。源氏は夫人に明石の君のことを話した。女王はどう感じたか、恨みを言うともなしに「身をば思はず」（忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな）などとはかなそうに言っているのを、美しいとも可憐かれんであるとも源氏は思った。見ても見ても見飽かぬこの人と別れ別れにいるようなことは何がさせたかと思うと今さらまた恨めしかった。

間もなく源氏は本官に復した上、権大納言ごんだいなごんも兼ねる辞令を得た。侍臣たちの官位もそれぞれ元にかえされたのである。枯れた木に春の芽が出たようなめでたいことである。

お召しがあつて源氏は参内した。お常御殿に上がると、源氏のさらに美しくなった姿をあれで田舎住いなかまいを長くしておいになつたのかと人は驚いた。前代から宮中に奉仕

していて、年を取った女房などは、悲しがつて今さらまた泣き騒いでいた。帝みかども源氏に
お逢いになるのを晴れがましく思召おぼしめされて、お身なりなどをことにきれいにあそびして
お出ましになった。ずっと御病気でありませんになったために、衰弱が御見えになるのであ
るが、昨今になって陛下の御気分はおよろしかった。しめやかにお話をあそびすうちに
夜になった。十五夜の月の美しく静かなもとで昔をお忍びになって帝はお心をしめらせ
ておいでになった。お心細い御様子である。

「音楽をやらせることも近ごろはない。あなたの琴の音もずいぶん長く聞かなんだね」
と仰せられた時、

わたつみに沈みうらぶれひるの子の足立たざりし年は経にけり

と源氏が申し上げると、帝は兄君らしい憐あわれみと、君主としての過失をみずからお認め
になる情を優しくお見せになって、

宮ばしらめぐり逢ひける時しあれば別れし春の恨み残すな

と仰せられた。艶えんな御様子であつた。

源氏は院の御為おんために法華經ほけきやうの八講を行なう準備をさせていた。

東宮にお目にかかるのと、ずっとお身大きくなっておいでになって、珍しい源氏の出仕をお喜びになるのを、限りもなくおかawaiiそうに源氏は思った。学問そうめいもよくおできになって、御位みくらいにおつきになつてもさしつかえはないと思われるほど御聰明ごそうめいであることがうかがわれた。少し日がたつて氣の落ち着いたころに御訪問した入道の宮でも、感慨無量な御会談があつたはずである。

源氏は明石から送つて来た使いに手紙を持たせて歸した。夫人にはばかりながらこまやかな情を女に書き送つたのである。

毎夜毎夜悲しく思っているのですか、

歎きつつ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな

こんな内容であつた。

大貳だいにの娘の五節ごせちは、一人でしていた心の苦も解消したように喜んで、どこからとも言

わせない使いを出して、二条の院へ歌を置かせた。

須磨の浦に心を寄せし船人のやがて朽たせる袖を見せばや

字は以前よりずっと上手じょうずになっているが、五節に違いないと源氏は思つて返事を送つた。

かへりてはかごとやせまし寄せたりし名残なごりに袖の乾ひがたかりしを

源氏はずいぶん好きであつた女であるから、誘いかけた手紙を見ては訪ねたい気がしきりにするのであるが、当分は不謹慎なこともできないように思われた。花散里はなちりなどへも手紙を送るだけで、逢いには行こうとしないのであつたから、かえつて京に源氏のいなかったころよりも寂しく思つていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
